

令和3年11月19日

南の風 424

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きになります。

特にスペインという国では、選択しているフットボールスタイルを育むのに野獣派は合いません。なぜなら認知力を養えないからです。スペインフットボール協会が特別なキャンペーンをしたわけではありませんが、認知力の重要性が浸透しているのかもしれませんが。

スペインではパワハラのようなことは起きませんが、フットボールを語る時に選手ではなく自分（監督自身）を主語にしてしまう野獣的な指導者が少なくないのが実情です。

彼らは、昔のやり方を引きずるベテランコーチというわけではなく、年齢は関係ありません。選手時代から得てきた学びと環境によるようです。20代のコーチもいます。

そのような現状を見るにつれて、生きてきた時代ではなく環境がものをいうことと、良きにつけ悪きにつけ文化は継承されてしまうことを思い知らされます。と同時に、私たちが取り組んできた環境の整備や、学びの場の創出の重要性をひしひしと感じています。

指導者の話をすると、ではスペインの保護者はどんな感じだろうと好奇心がわくかと思えます。スペインでも人数は少ないですが熱心すぎる保護者はいます。

このため、私たちのほうでさまざま工夫を施します。例えば、私たちの3、4、5歳児のクラスに、「フットボール教室」という名前をつけてないことを第2章で伝えました。指導するのはいずれも純然たるフットボールのコーチなのですが、単に幼児のクラスとして募集をかけます。

これは、わが子を何が何でもプロにしたいというような過度の執着をもたれないようにする意味もあります。私たちのクラブのこだわりであり、保護者の熱を下げる工夫です。

～ 中略 ～

ひとつのスポーツに特化することがその競技で優秀な選手を生むという考えではなく、さまざまな競技に触れさせてから専門を絞ることが優秀なアスリートを生む、良好なスポーツ文化を形成することにつながると思われています。

このため、右記のようなビッグクラブは少年チームをもちません。もたない代わりに、彼らは学校レベルでのスポーツをサポートしています。そして中学生年代に上がったときに、そのなかから有望な選手をスカウトしてチームをつくっています。

ここまで、佐伯 夕利子の著書『教えないスキル』～ ビジリアルに学ぶ7つの人材育成術 ～の抜粋引用をしてきました。

いかがだったでしょうか。

フットボールを通しての考え方がしたが、私は、バスケットボールの指導にも共通し、十分生かせるものだと感じました。もちろん、この考え方がすべてであるということではありませんが、皆さんの今後の指導の参考になればと思います。長い期間、お付き合いいただきありがとうございました。